

リゾート体験イベントにおけるホスト意識の 形成プロセスに関する研究 —『南紀熊野体験博』を例として—

○説田 寿¹・近藤 隆二郎²

¹学生会員 大学院修士課程 滋賀県立大学大学院 環境科学研究科(〒522-8533 彦根市八坂町 2500)

²正会員 工博 滋賀県立大学 環境科学部(〒522-8533 彦根市八坂町 2500)

本研究は、地域資源・文化の担い手としてのホスト(観光地住民)が、交流プログラムを通じたゲスト(観光者)との交流からホストとしての役割意識(=「ホスト」意識)を形成する実態に注目した。南紀熊野体験博リゾート体験イベントにおいて、イベントの準備・運営、現場での参加者へのサポート・指導を行う立場にあった体験リーダー(ホスト)を対象にアンケート調査を行い、イベントへの参加実態から、4つのタイプを抽出した。それにより、タイプごとに「ホスト」意識の傾向が異なることを明らかにし、それぞれに対応したサポート方法の必要性を指摘した。

Key Words: Hosts- Consciousness, "Experience Nanki Kumano" Exposition, role-consciousness, Tourism

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

観光活動の抱える問題のひとつとして、“お客様は神様”の表現に表されるように、ホスト(観光地住民)¹⁾がゲスト(観光者)¹⁾のニーズを満たすことを最優先課題とする単方向な交流形態が挙げられる。ゲストの支配に対してホストの従属という関係であり、ホスト/ゲストの相互作用から成り立つべき観光システムのバランスを崩し、観光活動に様々な支障を来す原因となっている²⁾。

また、新たな観光活動の形態としてホスト/ゲストの両者が観光プログラムに主体的に参加していく双方向型の参加プログラムが提起されている。

近藤が提案した「共演」概念は、演技者となった主体同士(ホスト/ゲスト)が各役割の「演技」を通じて相互干渉することにより新しい関係性が創造されるという動的な概念³⁾である。観光地という「共演空間」においてホスト(観光地住民)自らが舞台の演じ手となり、同じく演じ手であるゲスト(観光者)との交流を持つ中で観光形態を自分達の手で再創造していくことをねらいとしている。

一方、新井らにより紹介され注目を浴びている「エコミュージアム」は、地域全体を博物館として捉え、ゲスト(観光者)に対して地域住民自らがホスト役として地域資源・文化を紹介するという概念が示されている⁴⁾。しかし、導入の歴史が浅いため、“みせる”“伝える”といったホスト役を演じる地

域住民の役割意識(「ホスト」意識)の形成過程についての報告はなされていない。

これに対して近藤は、ミニ博物館事業における館長を対象に、館長(ホスト)として観光者(ゲスト)をもてなす立場にあった住民の役割意識の形成過程におけるコンフリクトについて明らかにした⁵⁾。

しかし、ここでは参加条件ごとの「ホスト」意識の差異と、それに対応したサポート方法までは明らかになっておらず、今後ホストのキャラクターに適したより具体的な参加プログラムのデザインを行っていくためにはこれらを明示し体系化する必要がある。

本研究では、和歌山県熊野地域で開催された「南紀熊野体験博」に設定された『リゾート体験イベント』において、イベントの準備・運営、現場での参加者へのサポート・指導を行う立場にあった「体験リーダー」を対象に調査を行った。ホストとして「体験リーダー」を担った観光地住民がその役割を受容していく過程に注目した(図-1)。

分析方法としてはアンケート調査により、「体験リーダー」の属性とイベント実施における行為・意識の変化を把握分析する。その結果から、ホスト意識が形成されていく実態を検証し、形成プロセスの差異とその特性を把握することより、今後の交流プログラムにおけるホスト役の適切な起用方法と育成プログラム作成のための知見を得ることを目的としている。

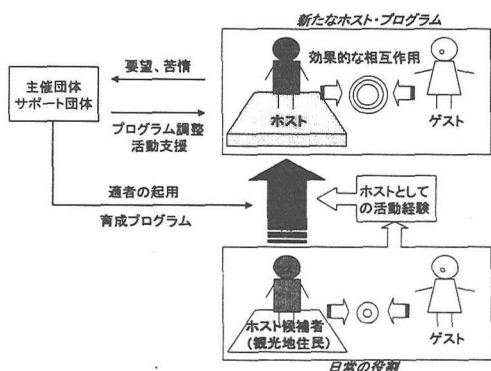


図-1 リゾート体験イベントにおける「ホスト」意識形成の構図

(2) 研究対象の概要

a) 『南紀熊野体験博』について

『ジャパンエキスポ 南紀熊野体験博 リゾートピアわかやま'99』（以後“熊野博”と略記）は1999.4.29～9.19の半年の期間にわたって、和歌山県南紀熊野地域16市町村（田辺市、上富田町、白浜町、大塔村、中辺路町、日置川町、すさみ町、串本町、新宮市、那智勝浦町、太地町、古座町、古座川町、熊野川町、本宮町、北山村）を舞台に開催された、“日本初のオープンエリア型博覧会”⁶⁾である。

熊野博は、「こころの安らぎ、心身のリフレッシュに最適な空間として南紀熊野地域を象徴的に取り上げ、そこでの実体験を多くの人に提供することで『わかやまりゾート』が私たちの新しいライフスタイルに大切な役割を果たすことをアピールします。」⁷⁾という基本理念のもとに開催された。サブコンセプトとして、「いやす」「みたす」「よみがえる」が設定され、各市町村において『リゾート体験イベント』を含めた様々なイベントが実施された。

b) 『リゾート体験イベント』について

『リゾート体験イベント』は、南紀熊野体験博公式ガイドブックでは次のように紹介されている。「でっかい自然のふところでは本当のリゾートに出会えるのが『リゾート体験イベント』。新しい発見と感動でこころ元気になる南紀熊野の旅がいっぱいです。16市町村と地域の人々が、地元の大自然や伝統文化などを生かしてつくりあげた魅力あふれるイベントの数々。全150コースにも及ぶイベントは8ジャンルに分けられ、好みに合わせてチョイスできるようになっています。しかも体験リーダーが参加者をサポート。誰もが気軽に楽しめるツアーを満喫しています」⁸⁾。熊野地域が持つ自然的・歴史的・文化的特性を利用し、開催期間中合計で400を超えるプログラムが仕組みられ実施された。

c) 「体験リーダー」について

「体験リーダー」とは、『リゾート体験イベント』においてイベントの準備・運営、現場で参加者の指導・サポートなどを行い、ホストとして参加者をもてなす側の立場にあった住民である。ひとつのイベントにつき1～数人の体験リーダーが参加者の対応にあたり、イベント内容に近い（職業・趣味の）専門技術・知識・わざを持つ者が任用された。

(3) 本研究の調査手法

a) 調査方法

体験リーダー各個人のイベントへの参加実態や意見、感想などを把握するため、アンケート調査をもとにデータ収集を行った。調査は、体験リーダーに参加した経緯、参加前・参加後それぞれの参加意識、についての項目を中心とした選択式（一部自由記述）のアンケートにより実施した。体験リーダー個々人の所在把握には、各イベントチラシに記述された所属氏名をもとに各市町村に照会してリストを作成した。氏名を確認した体験リーダー138人のうち、約87%にあたる120人の所在を把握した。このリストに基づき、各個人宅にアンケート用紙を郵送配布し、郵送にて回収した。調査は2回に分けて実施し、第1便は1999年9月30日に発送し（10月20日締切）、第2便は10月15日に発送した（10月30日締切）。回収結果は、発送120通で回収98通、有効回答は96通（回収率81.7%）であった。

なお、予備調査として、リゾート体験プログラム「備長炭炭焼き体験」（1999年8月5日～10日実施）に参加し、ヒアリング調査等を行った（説田）。

b) 分析手法

① 参加条件類型

アンケート結果をもとに、イベントに参加する背景となった「回答者の職業・趣味」（13カテゴリ）⁹⁾、「指導経験の有無」（2カテゴリ）¹⁰⁾、「回答者の年齢」（6カテゴリ）¹¹⁾の3要素を変数として数量化Ⅲ類を用いて分析¹²⁾し、得られたサンプルスコアを用いてクラスター分析¹³⁾を行った。その結果、体験リーダーを4類型に分類した（表-4）。

② 参加意識結果とのクロス集計

アンケート結果を用いて、イベント参加の動機、参加前の印象、参加前の工夫、工夫の内容、参加を通して得たもの、参加後の意識変化、体験リーダーに対する評価といった参加意識に関する項目を求め、参加条件類型とのクロス集計により、それぞれの相関を考察した。

2. 分析結果

(1) 「体験リーダー」への参加動機について

体験リーダー参加のきっかけは、全体の90%以

上が「他薦」であり、そのうち半数以上が市町村職員・実行委員会から推薦をうけたためと答えている(表-1)。

表-1 誰から体験リーダーを推薦されたか
(複数回答)

回答・回答者数 88 人	該当人数	割合
友人・知り合いから	4 人	5%
職場の同僚・上司から	11 人	13%
自治会役員から	5 人	6%
市町村の職員から	45 人	51%
熊野博実行委員会から	50 人	57%
その他	4 人	5%

「役場で募集があったから」(旅館業, 73 歳, 男)、「語り部の会の会員であり、熊野古道の案内をしていたので、自主的に案内役をかってでた」(町史編集委員, 71 歳, 男)といった自主的な参加者はごくわずかだった。

体験イベントにおける指導内容と職業・趣味との関係については、「職業と関係がある」と答えた人が約 63%、「趣味と関係がある」と答えた人が約 30%を占めた(表-2)。

表-2 体験イベントでの指導内容と職業・趣味との関係
*無回答 2 人は除く

	該当人数	割合
現在の職業	50 人	52%
過去の職業	11 人	11%
現在の趣味	24 人	26%
過去の趣味	4 人	4%
その他	5 人	5%
合計	94 人	100%

「イベント内容に関連した指導経験がある」人は約 56%であり、内訳は「押し花サロンを持って、押し花を指導しています」(押し花インストラクター, 55 歳, 女)「スキューバダイビングサービスをしているので」(スキューバサービス, 32 歳, 男)のように指導のプロとしてのインストラクターや、「環境庁の自然教室・自然公園指導員養成講座・各種自然教

室」(学芸員, 43 歳, 男)、「職業上いろいろな事業のたびに人前で話をすることがあった」(教育委員会, 50 歳, 男)といった教育・研究に携わる者、「農業・地元の祭り, PTA, 公民館」(町議会議員・農業, 57 歳, 男)、「文化財サークルでの指導」(無職, 79 歳, 男)に表れているように地域や趣味サークルの中でリーダー的存在にある人などであった。これは、「体験リーダー」としての適性がすでに地域で認められている者を中心に、実行委員会が参加交渉を行ったためだろう。また、年齢層は 40 代・50 代が中心だった(表-3)。

表-3 年齢層のグループ

歳	該当人数	割合
21～30	7 人	7%
31～40	14 人	15%
41～50	26 人	27%
51～60	20 人	21%
61～70	17 人	18%
71～80	12 人	12%
合計	96 人	100%

(2) 参加条件類型からみたホスト意識について

前述のように、体験リーダーを参加条件より分類した結果、「知識サービス」、「駆り出され型」、「趣味交流型」、「趣味・インストラクター型」の 4 類型にグループ分けした(表-4)。以下、各類型について詳細を記す。

A) 知識サービス型

JA 職員や学芸員、教員といった自ら高い専門性を持ち、仕事相手と接する職業のグループである。職業柄、指導経験は豊富で、年齢層は 20 代、40 代中心の若い集団である。

参加前の印象として、「無関心」と「自信なし」で全体の半数を占めており(表-5)、指導経験は豊富ながらも通常と異なる相手に対し、「説明する順序にまちがいがいいか、説明モレはないだろうか」と少々不安を感じた」(教育委員会, 50 歳, 男)と慎重な姿勢であることがわかる。そのためか、イベント前の工夫には力を入れており(表-6)、特に、「現場の下見」「資料・パンフの作成」といった工夫が多くなされており、「道具・グッズの用意」「勉強会」が少なかった(表-7)。これらの理由は、指導経

表-4 4 類型の参加条件の各特性

		A. 知識サービス型	B. 駆り出され型	C. 趣味交流型	D. 趣味・インスト型
参加条件の特性	該当人数・割合	19 人 (20%)	35 人 (36%)	11 人 (11%)	31 人 (32%)
	職業・趣味	JA職員・学芸員・教員	農林漁業・サービス業・公務員中心に多様	趣味	インストラクター(職業指導者)と趣味での参加者が混在
	年齢	20代・40代中心と若い	50代中心と比較的高い	60代・70代中心の退職者中心	30代・40代中心と比較的若い
	指導経験	豊富	乏しい	比較的豊富	豊富

表-5 参加前の印象

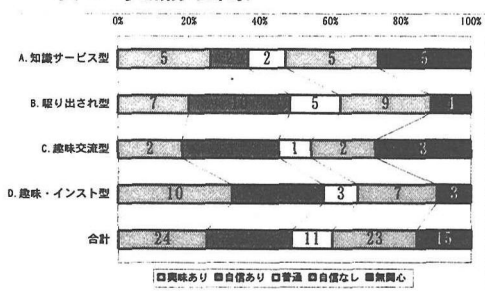


表-6 参加前の工夫の有無

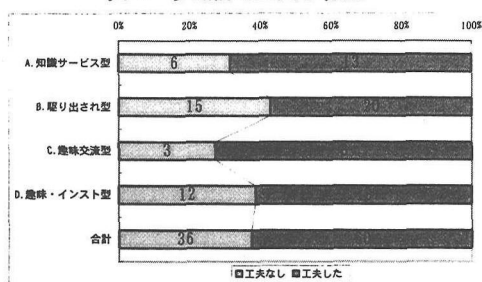


表-7 参加前の工夫の種類 (複数回答)

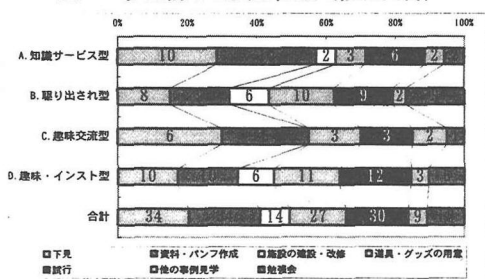


表-8 参加を通して得たもの

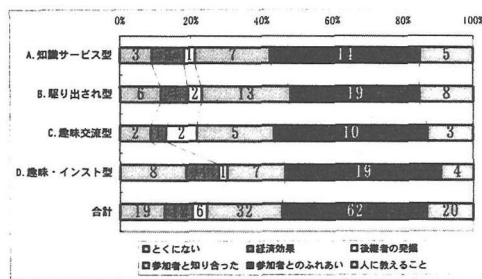


表-9 参加後の意識変化

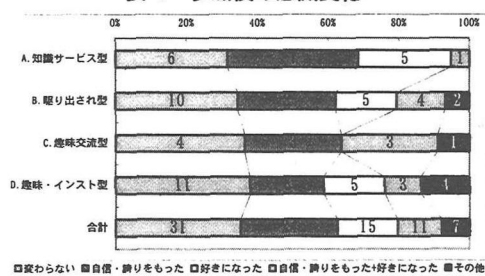
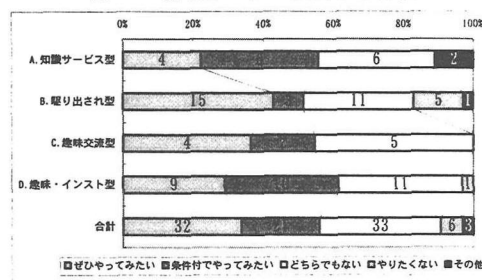


表-10 体験リーダーに対する評価



験が豊富なため、基本的な準備は必要なく、資料の作成などよりイベントを円滑に進行させるための工夫を行ったためと考えられる。

体験リーダーを通して得たものとしては、全体的に評価は高く、イベントを肯定的にとらえている事がわかった。(表-8)。

参加を通しての意識変化としては、ほとんどの人が何らかの変化があったと答えており(表-9)、「参加者がよく勉強されているのに驚いた。当方ももっと深く勉強する必要があると感じた」(教育委員会, 50 歳, 男)、「今回のイベントでははじめての経験ということもあり試行錯誤でしたが、今後森林インストラクターなどの資格を勉強して獲ることが出来ればと思います」(林業センター研究員, 24 歳, 女)という記述から、ホストとしての自覚を強めたことがうかがえる。

体験リーダーに対する評価は、「条件つきでやっ

てみたい」が最も多く(表-10)、条件に「時間的な拘束が少ないこと」(研究職, 25 歳, 男)を挙げる人がほとんどで、「日帰りイベントなど時間がそれほど長くないもの」(林業センター研究員, 24 歳, 女)なら担当してもよいと答えている。

特筆すべきは、「実際にはもっともっとたくさんの「体験リーダー適格者」が存在すると思う。お年寄りなども含めてもっとたくさん参加する場所・機会が増えることを切願する。」(学芸員, 43 歳, 男)、「少しスター性があるほうがいいのでは。女性にも多くリーダーが出て欲しいと考えている。高齢者の方には若い人がサポートする工夫がいいのでは」(教師, 56 歳, 男)といった体験リーダーのシステムに対しての提案を持ちえている点である。また、「今後のプログラム作りに役立つ経験」(レンジャー, 27 歳, 男)というように、今回のイベントでの経験を教訓に、次の機会に生かそうという建設的な思

考も持ち合わせている。

これらの特徴から「知識サービス型」のホストに対して有効なプログラムとしては、指導経験が豊富かつ自身で考え行動できるので、ある程度ホスト自身の自主性に任せることが有効だろう。フォローとしては彼らの提案・要望に対応できる体制を整える必要がある。特にスケジュールに合わせ短時間・短時間で可能なプログラムの調整、参加者の反応をくみ取るためのイベント後のアンケートの実施などが有効だろう。(図-2)

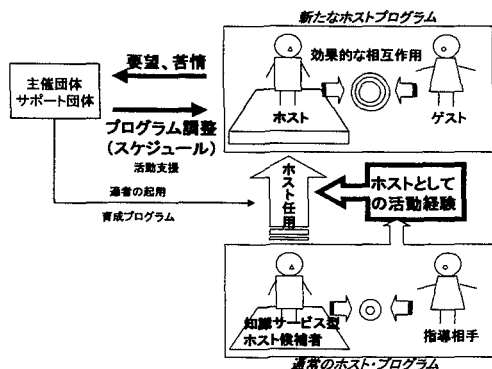


図-2 「知識サービス型」ホスト任用システム

B) 駆り出され型

農林漁業、サービス業、公務員など、職業は様々で、年齢層は高い。指導経験は乏しく、いわゆるホスト初心者が多く含まれる。イベント前に工夫した人は少なく(表-6)、工夫している場合でも「勉強会」や「道具・グッズの用意」が多く「下見」が少ないといった、先の「知識サービス型」とは正反対の結果になった(表-7)。

体験リーダーに対する評価は「ぜひやってみたい」と「やりたくない」の両極に分かれた(表-10)。これらの結果は交流から得たもの、交流での思い出、参加後の意識変化とほぼ相関関係にあった。体験リーダーを評価している人は、「出会いふれあいはすばらしいと思った。ぜんぜん知らない人同士が一つのものに没頭して真剣に取り組んだということはすばらしい」(農業, 62 歳, 男)といった参加者との交流・ふれあいの機会を得たことへの評価と同時に、「くだものは工業製品ではないことをわかってもらえた」(農業, 59 歳, 男)のように「知ってもらえた」という喜びを得たという記述もあった。

反対に、体験リーダーを評価していない人の中には、不本意にイベントに駆り出されたため、「今回のイベントはクラブメンバーで体験イベントをやると思ったのでしかたなくやった」(郵便局員, 51 歳, 男)といったように、体験リーダーに対してそもそも否定的な考え方の人や、「熊野古道の語り部として歴史等の知識が浅いため、参加者に満足してもらえないかどうか不安だった」(行政書士, 62 歳, 男)と

いう記述に見られるように、イベント前から不安を持っていた人が多く見られた。また、担当するイベントが、参加者不足により中止になった人も数名いた。

「駆り出され型」に分類されるような未経験者を「駆り出し」てホストとして依頼するときは、ホストのキャラクターに合ったプログラムの調整やバックアップ体制の整備が必須である。ホストの知識・技術レベルを見極め、必要に応じて育成プログラムを導入したり、ホスト役に専念できるようプログラムの調整や、場合によってはサポートメンバーの追加を行うなど、サポート団体とホストが積極的にコミュニケーションをとり活動支援を行うのが望ましい。また、ゲストとの交流を望む傾向にあるので、交流機会の多いプログラムを作成することも重要である。(図-3)

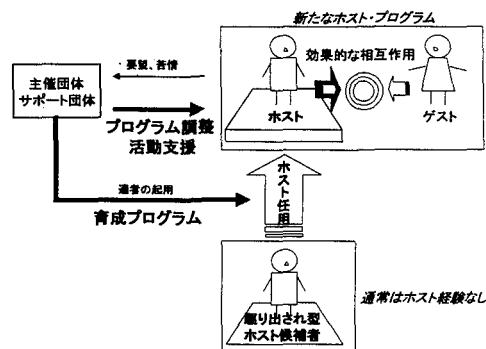


図-3 「駆り出され型」ホスト任用システム

C) 趣味交流型

体験イベントに趣味を生かして参加しており、年齢層は 60 代・70 代と退職者が多く、指導経験は比較的豊富である。イベント前の印象では「無関心」の割合が多く、慎重な印象である(表-5)。

イベント前の不安や心配が「なかった」と答えた人は、類型中でも最も多く、6 割以上が不安なしとしている(表-5)。イベント参加前の工夫は、多くの人が行っており(表-6)、中でも、「現場の下見」や「他の事例見学」が多く、「施設の改修」「勉強会」が少ない(表-7)。

体験リーダーで得たものとして特徴的に多く挙げられたのは、「後継者の発掘」である(表-8)。「できるだけ若い人々の養成に力を入れていって欲しい。その為に組織的な養成機関を作り継続して欲しい」(農業, 77 歳, 男)といった若手の育成に対するアイディアも聞かれた。

体験リーダーに対する評価では、全員が今後リーダーを「どちらでもない」か「やってみたい」と答えている(表-10)。「自分が地元において見逃していることが、他地方からの参加者によって指摘され、開眼させられたことが多かったこと。」(農業, 77 歳, 男)や、「角度を変えたものの見方・考え方」

(無職, 79 歳, 男)を知ったなど、参加者との交流を通ず中で地域に対し新たな価値意識を形成しつつある者もいた。「時間的拘束」を感じた割合が全グループ中最も少ないなど時間的ゆとりが豊富であることがわかった。

以上より、「趣味交流型」ホストは時間にゆとりがあり、かつ指導経験が豊富なため、プログラムをある程度ホスト自身の判断に任せ、彼らの個性やキャラクターを生かすことが有効と考えられる。アイデア豊富で地域の“知恵袋”としての側面や、若手の育成に関心があり地域を冷静に見据える目を持つことから、今後、地域の価値を次世代に伝えていく“語り部”として新たなホストの役割を形成していく可能性も考えられる。(図-4)

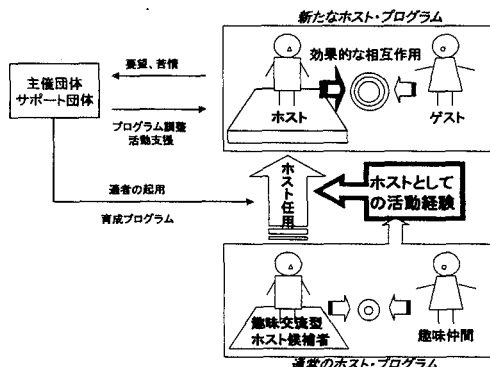


図-4 「趣味交流型」ホスト任用システム

D) 趣味・インストラクター型

プロのインストラクター(職業指導者)と、趣味でもセミプロとして指導経験の豊富な参加者が混在しており、年齢層は30代・40代中心と比較的若い。体験リーダーに対する不安感をもっとも高かった(表-5)。これは「駆り出され型」に見られるような「何をどのようにしたらいいのかわからない」といった意見は少数派で、天候や集客数・参加者への安全対策などプロ・セミプロとしての豊富なホスト経験に基づく具体的・現実的な不安が多くを占めた。工夫としては「試行」が多く、下見、資料・パンフの作成が少ない(表-7)。交流の思い出はあまり評価されていなく、参加を通して得たものはとくになか

表-11 ホスト任用時のプログラムの実施条件

	A. 知識サービス型	B. 駆り出され型	C. 趣味交流型	D. 趣味・インスト型
該当する人材像	学芸員、研究員、教員、JA職員など高度な専門知識を持つ者	指導経験の浅い者	趣味を通じた交流により指導経験を持つ者	インストラクター(職業指導者)やそれに類する指導経験を持つ者
有効なプログラム	企画段階からホスト自身の自主性に任せたプログラム	参加者との交流を重視したプログラム	ホストの個性・キャラクターを生かしたプログラム	長期的で安定的な指導が必要なプログラム
任用時の留意点	参加者のプログラムに対する反応・評価を知らせること 短時間・短期間のプログラムを設定すること	キャラクターごとのプログラムの調整や、バックアップ体制の整備が必要	後継者発掘を含めた若手との交流の機会を設けること	報酬やイベントの采配を任せることなどプロとして扱うこと

ったという回答がもっとも多い(表-8)。全体的に“冷めていた”ようだ。

体験リーダーに対する評価は、今後「やってみたい」「条件つきでやってみたい」と答えた人の総数が4類型の中でもっとも多い(表-10)。その条件として「ボランティアではない事」(ダイビングインストラクター, 36 歳, 男)といった意見が目立つ。プロとして仕事している以上、正当な報酬を受けた上で実施したいということであろう。「当日現場は我々に任せること」(無職, 49 歳, 男)といった意見からは、自分達のプロとしての仕事に口を出されたくないというプライドが見て取れる。また、「あまりにすごいすごいといわれるので、かえってそうでもないという控えめな態度をとらないと備長炭自身がえらそうになっているのは困ると思う」(主婦, 39 歳, 女)といった自戒もあり、地域文化の伝達者としての責任感も見られる。

強いプロ意識を持つ「趣味・インストラクター型」のホストは、現場現場での雰囲気流されることなく、冷静にプロとしての仕事をやり遂げる特徴が見られた。自らの指導に対しての自信と責任感を持っており、報酬やプログラムをホスト裁量に任せなどプロとして扱うことが必要だろう。プロとしてならば長期間安定した指導を遂行してくれるホストなので、期間の長いプログラムでの主戦力として期待できる(図-5)。

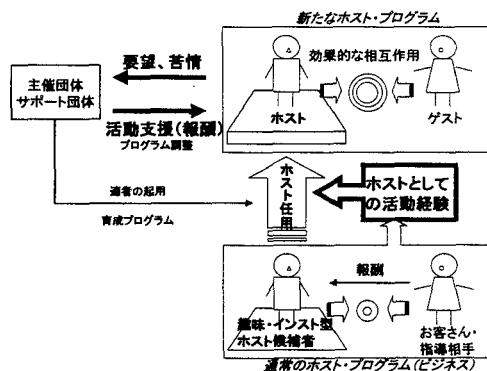


図-5 「趣味・インストラクター型」ホスト任用システム

3. 結論

参加条件より「知識サービス型」「駆り出され型」「趣味交流型」「趣味・インストラクター型」という4類型を抽出し、タイプ別に参加意識との比較を行った。その結果、タイプによって自律的にプログラム企画を任せたいほうが良い自律的ホストや、逆に個々の主体が持つキャラクターごとに綿密にプログラム調整や活動支援を行う方が良い他律的なホストなどがみられ、それぞれの特性の傾向を見極めた上で、各タイプに対応したサポート体制が必要であることが明らかになった(表-11)。

4. おわりに

本研究のまとめと課題を箇条書に示す。

- ・リゾート体験イベントの事例分析から、参加条件ごとのホスト意識の差異、サポートの必要性を明らかにした。
- ・イベントへの参加実態からホストを「知識サービス型」「駆り出され型」「趣味交流型」「趣味・インストラクター型」の4タイプに分類した。
- ・タイプごとにホスト意識の特徴と傾向の違いを明らかにした。
- ・それぞれのタイプに対しホスト任用時の留意点を提案した。

今後の課題としては、

- ・ゲスト側の意識形成過程も含めたホスト-ゲスト間の相互作用的な交流システムのより動的な把握
- ・ホスト-ゲスト間の交流レベルに応じた段階的な交流プログラムの検討
- ・時間経過による影響を考慮に入れた交流プログラムの検討
- ・交流プログラムのまちづくりなど体験イベント以外のプログラムへの応用の検討

が挙げられる。

謝辞：

本研究を進めるにあたり、アンケートにご回答いただいた体験リーダーの方々、「備長炭炭焼き体験」にてお世話いただいたの方々、「熊野博調査団」の方々のご協力をいただいた。また、各市町村の関係各位にも資料提供などご配慮いただいた。ここに記して感謝を表します。

なお、本研究は、平成10年度河川情報センター研

究開発助成「リバーミュージアムにおけるホスト・ゲスト間の交流システムに関する研究(代表：近藤隆二郎)」の一環として行ったものである。記して謝意を表する。

註および参考文献：

- 1) 観光活動におけるホスト(観光地住民)とゲスト(観光客)という用語はバーレン・L. スミスによって提示された。スミスは「観光・リゾート開発の人類学」(バーレン・L. スミス編, 三村浩史監訳, 勁草出版, 1989)の中でゲストとしての観光客がホストとしての地域住民にどのような影響を及ぼすかを、文化人類学の視点から考察した。
- 2) 前田勇編：現代観光学キーワード辞典, 学文社, pp. 133, 1998 ほか
- 3) 近藤隆二郎：環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究, 大阪大学学位論文, pp. 140-141, 1994.
- 4) 丹青研究所編：ECOMUSEUM～エコミュージアムの理念と海外事例報告～, 丹青研究所, 1993.
- 5) 近藤隆二郎・盛岡通：ミニ博物館事業における「館長」意識の形成過程に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 703-708, 1994.
- 6) 南紀熊野体験博実行委員会編『南紀熊野体験博公式ガイドブック』：南紀熊野体験博実行委員会 p7, 1999.
- 7) 同上：p6.
- 8) 同上：p30.
- 9) 総務庁編(1993)：「日本標準産業分類」を参考に職業を農林漁業, 建設業, 製造業, 卸売・小売業・飲食店, サービス業(教育・研究), サービス業(協同組合), サービス業(専門サービス), サービス業(その他), 公務, 無職, 不明・その他, 趣味の13カテゴリーに分けた。
- 10) アンケート結果をもとに、イベント内容に関連した指導経験がある(職業指導者も含め)、経験がないの2カテゴリーに分けた。
- 11) 回答者の年齢の上限が24歳、下限が79歳であったため、21～30歳、31～40歳、41～50歳、51～60歳、61～70歳、71～80歳の6カテゴリーに分けた。
- 12) 数量化Ⅲ類分析は、エクセル統計 2000 for windows を用いて解析を行った(2軸まで採用し、固有値が1軸 0.5413, 2軸 0.4876であった)。
- 13) クラスター分析には SPSS 9.0 for windows を用いた。クラスター化には重心法、測定方法には平方ユークリッド距離を用いた。クラスター分析によって得た dendrogram を参照にしながら、グループ化を行った。

Developmental Process of Host-Consciousness in Resort-experiencing Events -In Case of "Experience Nanki Kumano" Exposition-

HisashiSETTA, RyujiroKONDO

The Focus of this paper is on how the hosts, who undertake lural resources and cultures, develop their role-consciousness as hosts (Host-Consciousness) through the exchange with guests participating in the exchange program. For the "Experience Nanki Kumano" Exposition, we carried out questionnaires towards leaders (hosts) who played the role in preparation, operation, supporting and directing the participants, and then summarized them into 4 types after the analysis. Moreover, we found out that the tendency of Host-Consciousness is different for each type of host, so we pointed out the necessity of supporting methods respectively.